

池田恵一君のこと

櫻田喜貢穂（7組）

2023年3月17日深夜、池田恵一が逝ってしまった。

追悼文は書けそうもない。でも、どうしてこんなに寂しいのかはわかっている。だからそのことなら書けるのだが、果たして恵一がそれを許すかどうか。

50を過ぎて再び交流が始まると、私は会うたびごとに高校時代から恵一の影響を受けていたことに思い至った。それは潔さだけではない。通俗的な価値観を受け入れない頑なさも影響を受けたように思う。なんとも寂しいのは、恵一の潔さ、恵一の独特な頑なさにもはや接することができなくなってしまうからである。

私も恵一も、上田高校との適合性には欠けていた。学業成績を何よりも重視する当時の上田高校の価値基準に私は反発したが、恵一は反発すらせずに無視していた。その姿勢を私は好ましいと思った。私は俗っぽく、権威には弱く、それなりに格好をつけたい口であったが、権威は恵一には通用しなかった。恵一の前では格好をつけることははばかられた。そんなことをしたら恵一から皮肉まじりの辛辣なコメントが飛んできた。私はどうやら恵一に惹かれ、その存在をかなり気にしていた。

恵一もときに「すげえ！」と発することもあったが、世間的に高い評価を受けているものに向けられることはなかった。「すげえ」の基準も恵一独自のものだった。例えば、バックハンドストロークを苦手としていた私がネットの前に詰め寄って、バックハンドのハイボレーなんぞを決めようものなら「すげえ！」を連発した。からかわれているのかと思いきや、そうではなかった。勇気のない奴が苦手なことに勇気を出して挑んで成功させたことを讃えてくれたのだ。恵一の眼差しは能力の乏しい者が頑張ることに対して優しかった。

恵一は長年にわたり私のクライアントであったが、私の仕事ぶりに対して「すげえ！」と言っていたことはなかった。ただ、「おめえ、ちゃんと仕事をしてくれたな」と言われたことはある。それは正直なところ、嬉しかった。もう恵一に褒められる機会が来ることはな

い。それは寂しい。ただ、逝く時期が満開の桜と重なったのは、いかにも恵一らしい。勲章も銅像も似合わない恵一には桜のやさしさが似合う。

(23年3月23日)



京都修学旅行。
真ん中が池田君、左端が筆者